
あぜ道の散歩

ちょこみるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あぜ道の散歩

【Nコード】

N9123D

【作者名】

ちょこみるく

【あらすじ】

私はあぜ道を歩いていた。そこで、奇妙な紳士と出会う。ほのぼの不思議ストーリー。短編小説です。

あぜ道の散歩（短編小説）

私はあぜ道を歩いていて。あたりには水田が広がっている。

田植えがちょうど終わった時期で、一面緑。太陽に照らされて、美しく輝いている。

おばあちゃんの家に向かう途中。いつも通る道。日傘をさして。鼻歌を歌いながら。

向こうから一人の紳士が歩いてきた。見知らぬ人だ。

しゃれたシルクハットをかぶり、いかにも高級そうなスーツを身にまとっている。

手には茶色の杖がにぎられていた。背はすらっと高く、姿勢がとても良かった。年齢は60歳くらい。

それにしても、と私は次第に近づいてくる紳士を眺めながら思った。なんてミスマッチなのだろう。あの紳士とこの田園風景。モナリザが遊園地に立っていたらかもし出されるだろう違和感と、いい勝負だ。

もうすぐですれ違うという時。紳士が立ち止まる。

私もつられて立ち止まる。私は紳士の顔を見た。（背が高かったの、見上げなければならなかった。）優しそうな顔。紳士は微笑して私を見ていた。

「そこのお嬢さん」紳士は深みのある声で私に言った。
「私と一緒に行きましょう」

私は困惑した。周りをきよろきよろして、自分の他に誰もいないか確認する。
誰もいない。

「どこへですか？」私は胡散臭そうに紳士を見て、聞いた。

「そうですね」紳士は楽しそうに言った。

「天にでも行きましょう。綺麗なところですよ。散歩にはぴったりです」

冗談を言っているのだろうか。私は、じっと紳士の顔を見た。

「あの……」

「ああ、すいません。これはいきなり失礼しました」そう言って、紳士はシルクハットをとり、軽く一礼した。黒髪と白髪が混じっている髪は、短く切り込まれていた。

「私は、天からやってきた者です」そう言って、紳士は上を指差した。

「はあ、おもしろいご冗談ですね」私は、あいまいに笑って言った。
「いえいえ、冗談ではありません。信じられないかもしれませんが、私は天から降りて来たのです」

どうも、紳士は本気で言ってるらしかった。

そういうことか、私は思った。このおじいさん、ボケているんだ！

あ！そうだ。私は、はっとした。

おばあちゃんの家の近くに、老人ホームができたんだ。

数ヶ月前にオープンしたばかり。人手が足りなくて大変らしいって、おばあちゃんが言ってた。このおじいさん、抜け出してきたんだ。きっと、老人ホームの人は忙しくて気付かなかったんだ！

「あの、おじいさん」

「はい？」

「天はどこにあるのですか？」

「知らないのですか、上ですよ」紳士は、また上を指差した。

「でも、どうやって上にいくんですか？私たち、飛べませんよね」

「道があるんです。あちらに、天に続く道があります」

そう言つて、紳士は自分の来た道を示した。

私は、にやりとした。きっと老人ホームを示しているに違いない。ピンゴ！私は、自分の推理にすっかり満足していた。

とにかく、この老人をホームまで送り届けねばならない。

「私は、そこに案内してもらえますか？」

「もちろんです！」紳士はにっこりして言った。

「あなたに言われなくても、そのつもりでしたから」

二人はそろって、歩き始めた。老人ホームの方へ。ゆっくりと。

それにしても、気持ちのいい日だ。私は、日傘をたたんだ。春のうららかな陽の光を浴びたくなったから。いい日光浴日和。

「あれ！」突然左の田んぼのほうから声がした。

見ると、私のおばあちゃんの家の隣に住んでいる。山田さんだった。

「こんにちは！」

「こんにちは！良い天気ですねえ」山田さんは愛想良くいった。

「おばあちゃんの所に？」

「はい」私は答えた。

「でも、その前にこちらの方と老人ホームに行かなければならないんです」

紳士はにこにこして私の横に立っていた。

「どの人？」山田さんは大声で聞いた。

「どの人って……」

……。私は、バツと紳士の方を振り返った。

紳士は、相変わらず笑いながらも首を横にゆっくりとふっていた。

「彼女には私のことは見えません」

世界が止まってしまったかのように思われた。

「どうしたの？だいじょうぶ？顔色が悪いわよ」山田さんが心配そうに聞いた。

「いえ、大丈夫です。それではまた」私は抑揚がない声で言った。

そして、ズンズンと歩き始めた。足早に。

「おっと」紳士はそう言つて、私にペースを合わせて歩き始めた。

山田さんから50メートル程離れて、橋にさしかかった所で私は足をとめた。

「どうしたんですか？顔色が悪いですよ」紳士は心配そうに私の顔をのぞきこんだ。

「当然です！」私はキツとなつて言つた。

「あなたに聞きたいことが、いくつかあります」

「なんでもどうぞ」紳士は穏やかに言つた。

「まず」私は息をすつて、切り出した。

「あなたは何者ですか？」

「先程お話したはずですよ」紳士はもどかしそうに言つた。

「天からやってきた者です」

「何をしに？」私は詰問した。

「あなたを天への散歩にお誘いするためにです」

紳士はそこでクスッと笑つた。

一方私は笑うどころではなかった。私はゆっくりとまた歩き始めた。

天への散歩……。顔から血が引いていくのが分かつた。

私は死んだのだろうか。だから上からお迎えが来た。

でも、いつ？どうして？まだ十代のピチピチなのに……。

もしかしたら、人って自分が死んでも気付かないものなのだろうか。

心臓がバクバクと高鳴る。何事も起こりそうにない田園の中で。
こんなに美しく平和な場所で。バクバクと……。

「……！」

心臓が動いている！私は生きている！
そうだ。だってほら息をしているもの。

それに、よく考えれば山田さんは私のことが見えていたじゃないか。
血が顔に戻ってくると同時に、私の心は喜びで満たされた。

そして立ち止まり、やや後ろにいた紳士を振り返って自身満々に言った。

「まちがっているのは、あなたです」

「ほう！」紳士は、おおげさに驚いたよう言った。おもしろがっているようだ。

「私はが何かまちがいましたかな？」

「ええ……」私は今度はイライラをにじませて言った。

「あなたは私を天の散歩に誘いましたが、私は実は生きているんです。だってほら」

そこで私は右手を左胸にあてた。

「心臓が動いています。それに」次は大きく息を吸ってみせた。

「息もしています」

私は勝ち誇ったように紳士を見た。

紳士はしばらく沈黙した。そして、今度は紳士が先に歩き始めた。

「ええ、もちろんあなたは生きています」紳士が口を開いたのはちょうど橋を渡り終えた時だった。

「死んでいると思っただのですか？」

「はあ……」

「あはは、あなたはおかしい人だ」紳士は笑った。

「自分を死んでいると勘違いした人を、私は初めて見ました。いや、まことにおもしろい」

おかしいのはあんだ！そう言ってやりたいのを、私はなんとかこらえた。

その存在自体おかしい人に、おかしいと言われるなんて納得がない。

「ということは」私は、やけになって言った。

「私は今から死ぬんですか？そして、あなたが天に連れて行くと？」紳士は少し考えてから口を開いた。

「それは、私もよく分かりません。でも、今から死ぬというのは当たり前じゃないですか？人はいつか死ぬんですから。あなたはまだ若いので、今すぐ死ぬ可能性は低いでしょう」

「訳が分かりません」私は正直に言った。お手上げた。

「あなたは、勝手に妄想しすぎなんですよ」紳士は穏やかに言った。「それでは、どうして私はあなたのことが見えるんですか？山田さん、先ほど会ったおばあさんには見えなかったのに」

「それは、私があなただを散歩にお誘いしたからです。先ほどのおばあさんは、失礼なことを言いますと、散歩にお誘いしたいと思うほど美人な方ではありませんでした」

「……」

「まあ、年をめされてましたから仕方がないですな」紳士は弁解するように言った。

「つまり」私は、左手でこめかみを押さえながら言った。頭痛がしてきたのだ。

「あなたが私に声をかけたのは――」

「あなたが美しかったからです。それに、どこかであなたにお会いしたことがあるような気がしたからです。気のせいでしょうけど」

「……」私は言葉が出なかった。

「見てください」

しばらくの沈黙を破ったのは、紳士だった。紳士は、道の脇に咲いている花をさして言った。

「なんてきれいなんでしょう！」

「ええ、そうですね」私は上の空で言った。

ふいに紳士は悲しそうな顔をした。

「感じないんですか？」

「何をです？」

「春の喜びですよ。生の喜びですよ」紳士は両手を広げていった。

「はあ」

「厳しい冬を越えて、暖かな春の到来を喜んでいる生命が、私にはいきいきと見えるんです。この躍動感。私の胸は今幸福感でいっぱいです」

「はあ」

「私の気持ち分かりませんか？」紳士はまたしゅんとしていった。

「いえ、全くわからないわけではありません」私は正直に答えた。

「私もこの季節が一番好きですから。そしてこの道も」

「そうですね。それは良かった」紳士は嬉しそうに言った。

「ただ」

私はどうしても事をはつきりさせたくて切り出した。

「ただ？」

「あなたのことで頭が混乱してて……。そもそもあなたはどうしてもここに来たのですか。私と散歩する以外に用があつてここに来たんですよね？」

「そのとおりですよ」紳士は微笑んで言った。

「私はこの先の老人ホームに用があるんです。どうしてもしなければならぬ用が」

ここで私はようやく理解した。

「なるほど」私は満足して言った。

「全ての謎が解けました」

私は、かねがね言つてみたいと思つていた台詞を言った。推理小説によく出てくるこのきめ台詞。相手が人でないなら恥もない。

「あなたは老人ホームの誰かを迎えに来たのですね。ですがあなたは、その前に少し散歩をしようと思つたんです。だから私と天への散歩というのは嘘だつたんです。天への散歩に誘うのは私ではなく老人ホームにいる誰か」

「確かにあなたと天への散歩というのは嘘です。というよりはほんの冗談です。まさか本気にしているとは思いませんでしたよ」

最後の一言で、私はもう嫌だと思つた。謎を解いたという達成感の水の泡となつて消えた。いろいろ悶々と考えたせいで頭が痛い。そろそろこの変な老人から解放されたい、そう思つた時だつた。

「残念ですが、そろそろお別れの時間のようです」紳士が立ち止まつて言った。

「老人ホームはまだ先ですよ」

「時間なんです」紳士は繰り返した。

「散歩は終わりにして、ただちにそこへ行かなければなりません。もちろん、歩く以外の方法で」

「そうですね、残念です」歩く以外の方法がどういうものか少し気になったが、私は早くこの紳士と離れて頭を冷やしたかったので、あえて尋ねなかった。

「楽しい散歩でした。実は、散歩は久しくしていなかったんです。あなたと楽しい時間をすごせて幸せに思います」

「いいえ、こちらこそ」

「今日は青空が一段ときれいですね」紳士は空を見上げて言った。私も空を見上げた。

「そうですね。ところどころにある雲もきれいです」

さわやかな風がふいて、近くにたっていた木の葉がさわさわと音を立てる。

紳士の声とその音に掻き消される。

「——にも見てほしいです」

「誰にですか？」そう聞き返そうた時には、もう紳士はいなかった。風と一緒に行ってしまったようだった。

しばらくの間、私はそこに立ち尽くしていた。

「どこに行くの？おばあちゃん」

私がおばあちゃんの家に着いたとき、ちょうどおばあちゃんが玄関から出てきた。

少し顔が青ざめている。

「あら、今来たの？悪いんだけど、今からその老人ホームに行くの。先程、電話があつて知り合いが亡くなったことが知らされたの。今からその方にお会いしようと思って……」

私は息を呑んだ。あの紳士が連れて行った人にちがいない。天への散歩へ。

「私も行っていい？行きたいの！」私は必死に言った。

おばあちゃんは少し驚いた顔をした。

「いいけど。あなたも変わった子ね」

そして、私たちは目的地へ足早に歩き始めた。

「先程亡くなられた方はね」老人ホームへ向かっている時、おばあちゃんが口を開いた。

「私の親友の旦那さんで、私も若い頃顔見知りだったのよ。つい最近会った時は元気だったのに一体どうして……」

「こちらです」施設の人がある部屋の前まで案内してくれた。

おばあちゃんは、その部屋のドアを開けるのをためらって立っていた。

「チヨちゃん、きつととても悲しんでいるだろうね……」

おばあちゃんがドアに手をかけようとしないので、私が代わりに開けることに下。

ガラガラガラ。

白い壁。白い天井。白いベッド。窓からは暖かな日差しがさしこんでいる。

ベッドのそばで一人の老女が泣いている。

「チヨちゃん」おばあちゃんはそう言って、彼女のところに駆け寄った。

私は、ゆつくりと亡くなられた人のところに近づく。あの紳士が連れて行った人。チヨさんの陰に隠れて見えなかったその人の顔が、しだいに見えてくる。

私は立ち止まり、大きく息を吐く。窓からやわらかい風が入ってきてカーテンをゆらす。

窓の外から小鳥たちが楽しそうにさえずっているのが聞こえる。暖かな春の日。

亡くなった人は、あの紳士だった。

「私が知らせを受けてここに駆けつけたとき、あの人はもう逝ってしまっていたんです」

チヨさんとおばあちゃんと私は、テラスでお茶を飲んでいた。チヨさんがようやく気持ちが落ち着いたという時に、日の光を少し浴びたいといったのだ。

「あの人は、幸せそうな顔で眠っていました。私がどのような思いでここに来たのかも知らず……」チヨさんはハンカチを目に当てた。その時、私は初めて気付いた。チヨさんの目はブルーだった。

私も先程見た紳士の顔を思い出していた。確かに幸せそうな顔をして、眠っていた。このような美しい春の日を、喜んでいるような感じ……。

「気のせいかもしれませんが……」チヨさんは少しためらいながら言った。

「あの人のそばに寄った時、あの人の声が聞こえたんです。もちろんその時、あの人はもう亡くなっていたわけですから、普通ではあり得ないんですけど……」

「なんておしゃってたんですか？」私は続きを促した。

「今まで本当にありがとう。少し散歩に行つて参りますって。そう聞こえました。信じてもらえないかもしれませんが、私ははっきりと聞こえたんです」

散歩か、と私は思った。あの紳士は一人で天の散歩に行ったのだ。また、私は勘違いをしていた。やらなければならない用とは、誰かを天に連れて行くことではなく、チヨさんにお別れの挨拶をいうこと。

「もちろん、信じますよ」おばあちゃんがにっこりして言った。

「あの方のしそうなことじゃありませんか。ご冗談が好きで、本当に愉快な方で……」

「ええ、でも愉快すぎるところもありました。あなたみたいな若いお嬢さんを見るとね」

チヨさんは私に対して微笑みながら言った。

「どうしてもちよっかいを出さずにはいられない性格でした」
「……」

「でも、あなたのことを深く愛してられたじゃない。本当にあなたは大切にされてたわ」おばあちゃんが、チヨさんの背中をトンと優しくたたきながら言った。

「みんなが羨むぐらい」

チヨさんは少し嬉しそうに笑った。

「あの方は、本当に幸せだったと思います。ずっと散歩がしたいって言ってたんです。数ヶ月前イギリスで足を悪くして以来、日本ではずっと寝たきりでした」

「チヨちゃんね」おばあちゃんが私に説明した。

「お父様がイギリスの方なんだよ。それで縁があって、旦那さんと一緒に数年イギリスに行ってたんだよ」

「きつと今頃どこかで散歩を楽しんでいるでしょう。こんなに美しい日ですもの」

「私もそうだと思います」私は心からチヨさんに同意した。

「そして、チヨさんにもこの素晴らしい青空を見てほしいと思ってるのではないでしょうか」

チヨさんは少し驚いた顔をしたが、すぐに笑って言った。

「そうですね」

私はあぜ道を歩いていた。あたりには水田が広がっている。

田植えがちょうど終わった時期で、一面緑。太陽に照らされて、美しく輝いている。

おばあちゃんの家から帰る途中。いつも通る道。日傘をさして。鼻歌を歌いながら。

橋のちょうど真ん中にさしかかった時、心地よい風が吹いた。春の香りがした。

なんとなく立ち止まって後ろを振り返ると、あの紳士が綺麗だと言った花が、風に揺れていた。

確かに春はとても美しい。

ふいに私は胸がいっぱいになる。

喜びと嬉しさと切なさで。

どうして切なさを感じるのだろうか。

知っているからだ。私は思った。

花が咲き乱れたり、木に若葉が茂ったりするその前のこと。

冬に花は枯れ、葉は全部落ち土に返っていったのだ。

生命の躍動感を感じれば感じるほど、死もいつそう鮮明に感じられる。

あの紳士は、死にもっとも近い所にいたからこそ生をより敏感に感じていたに違いない。

——春の喜びですよ。生の喜びですよ。

私はあの紳士の言葉を思い出した。

——厳しい冬を越えて、暖かな春の到来を喜んでいる生命が、私にはいきいきと見えるんです。この躍動感。私の胸は今幸福感でいっぱいです。

青空を見上げる。今日の空は吸い込まれていきそうなほど、青い。
私は再び歩き始めた。やっぱり私は好きだ。
この季節。そしてこの道が。

5（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9123d/>

あぜ道の散歩

2010年10月9日20時38分発行